広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	移民の親子を重ねて『枕草子』を読む ： 定子と清少納言の関係に着目して
Author(s)	金（神谷），志唯（志織）
Citation	国語教育思想研究 , 32 : 42 - 46
Issue Date	2023-12-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00054798
Right	
Relation	

移民の親子を重ねて『枕草子』を読む
―定子と清少納言の関係に着目して―

広島大学大学院・院生　　金　志唯（神谷　志織）

キーワード：枕草子、移民、関係性

１、はじめに―筆者の背景と問題意識

筆者はニューカマー２世である。筆者の両親は約30年前に渡日した韓国人であり、筆者は幼少より日本で育ち、日本の公教育を受けてきた。筆者の両親は日本語能力が高く家庭でも日本語を中心に使用しており、筆者は日本語が自身の母語であると考えている。筆者は言語的な困難に直面することも特になく、外国にもルーツをもつからと何かに困ったり悩んだりすることなく育った。しかし、改めて自分の国籍やアイデンティティについて考えてみたとき、自分のアイデンティティがどこか不安定に揺らいでいることに気付き、外国にもルーツをもつ子どもに関する研究に取り組むようになった。

研究に取り組む中で、筆者はオートエスノグラフィー的な手法を用いて自分の〈経験〉を見つめ直すことを行い、自分自身でさえ気付かなかった困難や生きづらさがあったのだと認識するようになった。自分が「日本人」にも「韓国人」にもなりきれないという感覚を抱いていたこと、家庭におけるしんどさを感じていたこと、そうした家庭のしんどさを誰かに話すことに強い抵抗があったこと、などに気が付いた。

さらに、その後に行った「親の一方あるいは両方が外国出身である」・「幼少より日本で暮らしている」方を対象としたインタビューの結果、移民家庭の親子関係における特徴が明らかになってきた。自身の経験ともあわせて、現在は特に移民の親子の関係やコミュニケーションに関心をもち、研究に取り組んでいる。

また、筆者は2022年度より私立A中学校で非常勤講師として古典を担当している。その中で『枕草子』に再会・再読するうち、定子と清少納言の関係が移民家庭の親子関係と共通する点があると考えるようになった。本稿では、移民家庭の親子関係についてまとめた上で、『枕草子』における定子と清少納言の関係について述べていく。

２、移民家庭の親子関係

２、１、インタビュー調査の結果から

はじめに、先述したインタビュー調査の概要を以下に示す。

【表１】調査の概要

	年齢・性別	渡日年齢	父の出身	母の出身	インタビュー実施回数
A	20代女性	日本生まれ	ブラジル	ブラジル	２回（約２時間半）
B	20代女性	日本生まれ	中国	中国	１回（約１時間）
C	20代男性	５歳	中国	中国	１回（約１時間）
D	20代女性	日本生まれ	中国	中国	２回（約４時間）
E	20代女性	５歳	韓国	日本	２回（約４時間）
F	20代男性	４歳	韓国	韓国	１回（約１時間）
G	20代男性	日本生まれ	日本	香港	２回（約３時間）

上記７名の方への調査結果のうち、G さんを取り上げた金（神谷）（2021）では、G さんの語りの中から「アイデンティティ」、「外国出身の親との関係」という二つのモチーフにおいて、特に調査協力者の複雑かつ切実な思いが語られ、大きな意味を有することが示された。なかでも、「外国出身の親との関係」については、「高校生の頃から母と「ちゃんと本音で」向き合えていなかったのではないかと次第に考え始め」、「自分と母とのコミュニケーションに「後悔がある」と」いう語りがみられた（p. 44）。G さんの後悔は、母に対して「ちゃんと」伝えようという姿勢が不足していたこと、そして異国で苦労したであろう母の心情を想像して慮り、そんな母の

思いを言葉で受け取ることができなかったことに対するものであった。

G さんの例で挙げたような親子関係に関する語りは、G さんのみならず他の調査協力者の語りにおいてもみられた。

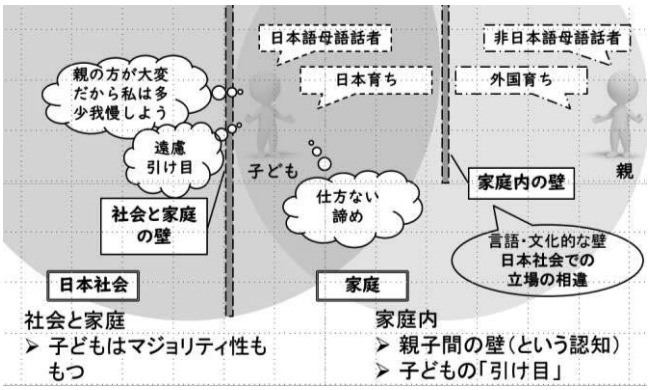
まず、外国出身である親の苦労について思いを馳せる語りがみられた。外国出身の親が日本で子育てを行う場合、自分にとっては新しい言語や文化に触れながら子どもを育てることになる。D さんが「今となっては感謝してることけっこうあるのは(中略)うちの両親は、日本でこの子たちは長い間過ごすはずだから、日本語で、日本の教育や文化の中で育っていくべきだって考え方だったので。今だから多分苦労したんだろうって分かるんですけど」と語るように、調査協力者たちは度々両親の苦労に思いを馳せたり感謝の念を抱いたりしている語りをみせた。幼少期より日本で育ち、日本の言語や文化を難なく習得する子どもに比べ、その子どもと接するために親は言語や文化を習得したり理解したりしようと努力することになる。本調査における調査協力者は７名とも、そうした親の努力やその基盤となる自身への愛情を感じており、親子関係は良好な様子であった。

その一方で、G さんのように親との関係に複雑な思いを抱いている場合もみられた。G さんの語りでもみられたことであるが、外国出身の親に対して自身の悩みを相談するといったことは少なかったと振り返る調査協力者は複数名いた。例えば A さんは「普通は親に聞いたり相談したりするであろうところでも、けっこう自分たち（妹と）で考えないとっていうのはけっこうあったかなと思ってて。未だに人に相談しない癖があって自分で考えて完結しちゃう」と話す。親の愛情や自身のための親の努力を感じ、自身も親とのコミュニケーションのため努力し互いに愛情を抱いている親子でも、言語的・文化的な壁のためにどこか親との距離を感じていることが示された。

２、２、移民家庭の親子関係における特徴

では、なぜ親子間に距離が生じてしまうのか、その背景として考えられる構造を【図１】に示した。

まず、子どもたちは家庭において容易には親に自分の言葉が伝わらないという経験を何度も繰り返すことにより、親との間に言語的・文化的な壁を感じる。幼少期から何度も繰り返される経験によって、次第に子どもの中でこの壁は強固なものとして認知され、「仕方ない、どうしようもない」という諦めの姿勢が生じてしまうと考えられる。



【図１】移民家庭の親子関係における壁

さらに、家庭の外にも着目し、日本社会との関係を加えてみる。

移民の子どもは、自分自身は幼少期より日本で育ったことでその親以上に日本社会に溶け込んでいる。日本語を流暢に話し、言語のみならず日本の文化を内面化している。それに比べ、外国で育った親は子どもたちのように日本社会に溶け込むことは困難である。子どもたちは自分が親よりも日本社会で優位で恵まれていることにどこか自覚的であり、日本社会でマイノリティとして生きる親の苦労を理解している。こうした「自分は親よりも有利な立場にある」、「親の方が苦労している」と引け目を感じるほど、家庭内における多少の問題は「自分が我慢すればよい」、「私が頑張ればよい」と親に対する遠慮が生じ、家庭内の壁がさらに強固になってしまうと考えられる。

ここに、移民家庭の親子関係における大きな特徴がある。移民の親子は、親と子という立場からみると、大人であり養育者である親の立場が強いといえる。一方で、幼少より日本で育ち日本の言語・文化を会得する子どもに対し、努力し苦労しながらもマイノリティという立場に置かれる親という視点からみると、日本社会においては子どもの方が強者となる。つまり、通常の親子関係から立場が反転してしまうのである。

２、３、移民の子どもの思い

移民の子どもの多くは、自分以上に苦労しながらも自分たちを育ててくれた親に対し、感謝と愛情を

もっている。そして、日本社会で苦労を強いられる親の立場にどこか同情的であり、自分はそうではないという引け目を感じる。そのため、親にそれ以上の負担をかけないよう、「自分のことは自分で」頑張ったり、自分の素直な気持ち以上に親を思いやることを優先しようとしたりする。そして、言語、あるいは「親に向かってこうした思いを伝えづらい」という立場の違いを理由に、その本音を親に語ることはないし、そのほかの人にも語ることはほとんどない。子は日本社会において自身より弱者である親を思いやり、時には守ろうとさえしながらも、親が親子関係上は権威的に自身より上の立場であるために、その思いを直接ことばで伝えることはできず、一人で行動に示すことで親を守ろうとするのである。

３、定子と清少納言の関係―『枕草子』をめぐって

先述した移民の親子関係について考察する中で、また、自身も移民家庭の子どもである筆者の立場から、『枕草子』を読んだとき、筆者には定子と清少納言の関係が移民の親子関係と重なってみえた。それは、定子と清少納言の関係において、以下の３点の特徴がみえたためである。

①身分上、定子が仕えられる側・清少納言が仕える側という上下関係があること

②身分上、立場が上である定子が不遇の身であったこと

③清少納言は定子を気遣い、尽力していたがそれを直接ことばで定子に伝えていないこと

本項では、上記の観点から、定子と清少納言の関係について整理する。

３、１、定子の不遇

枕草子における定子と清少納言の関係をみる前に、まずは定子について整理する。定子（977-1000）は藤原道隆の娘で一条天皇の后であり、清少納言が女房として仕えた相手である。一条天皇の后としての定子の人生を簡単に【表２】にまとめた。

【表２】からわかるように、定子は父・道隆の後ろ盾のもと一世を風靡するも、父を亡くした後は兄が都を追われ、後ろ盾を失いその地位が揺らいでいく。道長が権力を握り、定子を追い落とし娘・彰子を押し上げ、しまいには一帝二后の事態となる。それでも一条天皇の寵愛は揺るがず、定子は三人の子を産み、力尽きて若くして亡くなってしまう。一条天皇の后としての定子の人生は、決して幸福とは言い難いものであった。

【表２】一条天皇の后としての定子の人生

正暦元（990）年	正月	定子入内
	5 月	兼家、病気のため摂政を辞し関白へ、さらに関白を辞す 道隆関白、摂政へ
	10 月	定子立后、中宮へ
正暦４（993）年		道隆関白
長徳元（995）年	３月	道隆病、伊周に公事を行わせる（伊周に関白を譲ろうとするが許されず）
	4 月	道隆関白を辞す（再度伊周の関白就任を奏請するも許されず。出家） 道隆死去 道兼が伊周を退け関白へ
	5 月	道兼死去。道長内覧 （道長と伊周の対立が深刻化）
長徳２（996）年	正月	伊周、花山院奉射事件
	2 月	伊周・隆家の罪名勘申が命ぜられる
	3 月	中宮定子、懐妊のため二条邸に退出
	4 月	伊周・隆家、太宰権帥に左遷。中宮定子、出家
	10 月	伊周、秘かに入京、母貴子と定子への見舞が露見、大宰府に護送
	12 月	中宮定子、修子内親王出産
長徳３（997）年	6 月	中宮定子、一条天皇の希望により再入内
長保元（999）年	8 月	中宮定子、職曹司より生昌邸へ
	11 月	彰子入内 中宮定子、第一皇子敦康親王出産。彰子、女御へ
長保２（1000）年	2 月	道長の娘・彰子、立后 彰子を中宮、定子を皇后の一帝二后並立初例となる
	12 月	皇后定子、媄子内親王出産、翌日死去

（山本（2017）を参照し筆者作成）

３、２、『枕草子』における虚偽

清少納言が『枕草子』を本格的に執筆したのは、長徳２（996）年の秋ごろから翌年ごろにかけて清少納言が宮仕えから下がり自宅にこもっていた時期であるとされる。つまり、政変が起こり、定子が出家するという、定子の不遇の時代が始まったあとのことであった。

しかし、『枕草子』では定子の身に起こる数々の不幸はほとんど描かれない。『枕草子』が描くのは、機知と教養に満ちた后・定子と、定子を囲む女房たちの輝かしい後宮の日々である。『枕草子』の作品世界において、定子は不遇の身ではなく、素晴らしい後宮文化を花開かせ、人々から尊敬される后として描かれ続けた。

これがわかる特徴的な章段がある。第６段「大進生昌が家に」である。第二子を身ごもっていた定子は出産のため平生昌邸に移ることとなる。『枕草子』第６段では、次のような記述がなされる。

> *大進生昌が家に、宮の出でさせ給ふに、東の門は四足になして、それより御輿は入らせ給ふ。*
>
> （清少納言 2014:33）

生昌邸の門は元々「板門屋」という、簡素な門であった。それを、定子を迎えるために「四足門」に作り替えたという記述である。当時、皇族が身分の低い者の邸に来る際には門を四足門に作り替えていたのだという。

しかし、藤原実資（957-1046）が日記『小右記』に記した当時の記事には、以下のような記述がみられる。

> *庚申大外記善言朝臣云去夕中宮出御前但馬守生昌宅御輿一宮乗糸毛車件宅板門屋人々云未聞御輿出入板門屋云々*
>
> （藤原実資 1915:147）

「件の宅は板門屋なり」、人々が「御輿が板門屋を出入することは未だ聞かず」と噂したとあることからわかるように、生昌邸の門を四足に作り替えたという事実はなく、定子は板門屋から出入りしたと考えられている。つまり、『枕草子』における記述は虚偽であると考えられる。

清少納言は、后でありながらそのような仕打ちを受ける定子の姿は決して描かず、たとえ事実と異なろうとも、定子を輝かしい自身の主君として記述した。『枕草子』は、定子に捧げられた作品であり、定子の生前はその心を慰め、その没後には鎮魂の思いをこめて執筆が続けられたと考えられている。

３、３、清少納言の思い

清少納言は、どのような思いで『枕草子』執筆に取り組んだのだろうか。また、時代に翻弄され、不遇な晩年を迎える主・定子をどのような思いで見つめていたのだろうか。

定子は身分上、清少納言の上にたち、清少納言にとって定子は仕えるべき主である。その構造は越えられるものではない。一方で、年齢的には清少納言が年上であることに加え、定子は実家の凋落により翻弄される不遇の人であり、清少納言はそうではなかった。定子が道長に追い落とされる中、道長側が清少納言を陣営に引き込もうとする動きも見られたといい（山本 2017:118）、清少納言は時代の流れの中で自身の立場を有利に選ぶこともできる立場であった。

そのような状況下で、時代に翻弄されるしかない定子をみて、清少納言は定子の不遇さを内心哀れみ、同情していたとも考えられる。歯がゆい思いもしたかもしれない。しかし清少納言がそうした自身の思いを明かすことはない。清少納言が選んだのは、定子に直接慰めの言葉をかけることではなく、『枕草子』という作品を通し、「不遇ではない」定子の姿をのみ描き続けることで、世間の目から定子のイメージを守り、定子の心を慰めることであった。あくまで定子に仕える一人の女房という立場から、定子の立場・面子を守ることで定子を思いやろうとしたのだといえる。

４、移民の子どもの立場から『枕草子』を読む

筆者は移民家庭の子どもである。そうした背景をもつ筆者が『枕草子』とそれをめぐる定子と清少納言の関係、清少納言の思いに触れたとき、筆者は定子と清少納言に移民の親子が重なってみえた。そして、清少納言が定子を思いやる切実な気持ちに、移民の子どもの姿が重なってみえたのである。

まず、一つ目に二者の関係性における上下の逆転が共通している。定子・清少納言も、移民の親子も、

立場上一方が上に立ちながらも、上に立つ者が不可抗力に社会的弱者の立場にある。下に立つ者はそれをどこか同情的にみている。

次に、下に立つ者は相手に同情し、思いやり、力になろうと努力するもそれを直接相手に表現することがない。清少納言や移民の子どもの相手に対する思いは、語られることがなく、それが相手に伝わっているかどうかも定かではないのである。

移民の子どもも清少納言も、自分よりも相手ファーストの姿勢で、自分の大切な人を思いやろうとしている。自分より立場は上であるはずだけど、不遇な相手に同情し、守ろうとする。相手への切実な感情がそこにはあるように思う。

移民の親子も清少納言・定子も、直接語り合うことはないから、本音で繋がり合ってはいないのかもしれない。しかし、互いが互いを大事に思いやり、思われている実感がその関係性には生まれている。それでも直接的には語り合えない切なさも同時に存在し、この中で生まれる感情の切実さに筆者は共感し、惹かれている。

この関係性は、思いが語られないからこそ切なく美しくみえる一方で、移民の親である両親と本音で語り合えなかったという実感をもつ筆者としては、清少納言や移民の子どもの思いが相手に「伝わっていてほしい」と願わずにはいられない。容易にはことばで思いを伝え合えない関係の中で、思いが伝わった実感を持ったり、相手と繋がり合えた実感をもったりするためには、どのようなコミュニケーションを図ればよいのか。『枕草子』をめぐる定子と清少納言は、そうしたコミュニケーションのあり方を考える上で大きな力となる教材であると考える。

５、おわりに

ここまで、『枕草子』を移民の親子を重ねて共通する特徴について述べた。

ただ、移民の親子と定子・清少納言は異なる点もある。移民の子どもは自分の切実な思いを親に伝えることはなかなかない。一方、清少納言は『枕草子』を世間だけではなく定子にあてて書き、定子本人に献上した。「書かない」ことが多いが、これを読んだ定子は「書かない」ことによる清少納言の意図・思いを汲み取っただろう。政変の真っただ中に身を置かれた本人だからこそ、清少納言があえて書かなかった数々には当然気付くだろうし、そうした状況下でこの作品を書いた筆者・清少納言の思いを受け取れたかもしれない。『枕草子』を介して、定子は筆者・清少納言の思いに触れることができたのではないだろうか。

また、清少納言と定子の間における「語らなさ」は、二者の権力関係、そして『枕草子』を読むであろう世間の人々からの目を気にしてのものであったと考えられる。一方、移民の親子の場合の「語らなさ」は、二者の権力関係に加え、「言っても伝わらないかもしれない」という言語的な壁による諦めによって生じている場合もあるだろう。移民の親子が思いを伝え合うためには、権力関係と言語的な壁の二つを越えなければならない。

移民の親子と定子・清少納言とのこれらの違いについて、今後さらなる検討を行う必要性が課題として残される。しかし、権力関係など、何らかの壁によって生まれるコミュニケーションの困難さに出会い、その壁を乗り越えるコミュニケーションのあり方について考えられる可能性が『枕草子』という教材にはある。

今後は『枕草子』を教材に、ことばで伝えること、コミュニケーションについて考えられる実践を構想していきたい。

引用・参考文献

清少納言著・石田譲二訳注(2014)『新版枕草子(上)』角川ソフィア文庫

金志唯（神谷志織）（2021）「外国出身の親をもつ子どものライフストーリー：アイデンティティと親子関係をめぐる揺らぎから」『語りの地平　ライフストーリー研究』６号，pp. 29-50

原由来恵（2022）「『枕草子』「大進生昌が家に」章段のストラテジー」『二松學舍大學論集』65，pp. 1-14

藤原実資（1915）『小右記１』日本史籍保存会 https://dl.ndl.go.jp/pid/949530

前田雅之・小嶋菜温子・田中実・須貝千里編（2003）『〈新しい作品論〉へ、〈新しい教材論〉へ［古典編］３　●文学研究と国語教育研究の交差』右文書院

山本淳子（2017）『枕草子のたくらみ　「春はあけぼの」に秘められた思い』朝日新聞出版